

心と こころ

「続・思春期」



社団法人

宮城県精神保健福祉協会 広報

登校拒否を考える夏の全国 合宿イン松島に参加して

企画広報委員会委員 瀬川 勝子

まず、大会の主催者「登校拒否を考える全国ネットワーク」について紹介したい。登校拒否・不登校は一九七五年頃から急増し一般には「心の病」「逃避・甘え・怠け」などと異常視され、治療や特別な訓練の対象として扱われてきた。そのような教育・医療等の専門家として世間の見方、考え方に振り回されないで、不登校の子供を持つ親自身が学び合いい、子供と共に歩もうと親・市民の自主的な会が全国各地に生まれ、一九九〇年に全国ネットワークへと発展した。そして、誰でも自由に参加できる全国合宿研修会が毎年行われ、一〇回目を迎えた今年八月二十一日の松島開催となった。

今回初めて私も親の立場で参加することができた。全国からの参加者は約六〇〇人と聞いた。内容は子供と大人用の二本立てのプログラムで構成されていた。子供交流は子供たちが自身が企画したものらしく、ゲーム、まんが、創作、パソコン、楽器演奏、空手、クッキング…と盛りだくさん。大人向けには、ネットワーキング代表奥地圭子氏の基調講演、講師を迎えての四つのセミナー、懇親会。「卒後と中退」、「二〇代の悩みと支援」、「家庭内暴力・強迫行動」、「居場所・フリースクール」、「医療のかかわり」など多彩な内容の一二の分科会、「少年事件」をテーマに緊急セミナー、経験者シンポジウム。若者のシンポジウムでは彼らの素直な気持ちを開けた。「こんな生き方もあ

るよ。学校には行かなかったけれども自分の好きなこと、やりたいことが見つかった」と。今までのつらいこと、悲しいことを乗り越えての、すがすがしさと輝きがあった。参加者の体験から得た一言は心に響くものがある。悩み苦しむ親にとって同じ当事者の体験談は自らの気づきとなり、励みになり癒しになる。

先頃、文部省は児童生徒の不登校者数を一三万人と発表した。不登校の子供は確実に増えているのだから、不登校在籍者比率を減らすとか、学校復帰だけを唱えるのはやめて、学校に行かない子も認めた上での対策が必要との思いを強くした。

不登校はいまだ異常行動、犯罪予備であるかのように見られがちである。この大会はマスコミでもとり上げていた。見方を変え、多様な生き方を認める機会となり、もがき苦しんでいる子供たちや孤立無援な親たちの助けになることを願いたい。

思春期だけでは語れないもの

フリースクール森遊 主宰 蜂屋 美子

今年の夏はとりわけ特別な夏だった。私は松島町の幡谷という所で、「フリースクール森遊」を主宰している。不登校の子どもを中心に、障害のある人、心に深い悩みをもつ若者達など様々な人が集っている。勿論、大人もいる。親、教師、賛同、支援して下さる人達。更にスタッフ志望の学生さん、見学に来る人など、実に様々な人が、それぞれの思いを抱えて来ている。日頃こういう人達と接していて共通に感じる事は、求められているものは一緒だという事だ。百人いれば百の気持ちがあり、表現の方法も百通りだ。皆が違ってあたりまえのはずなのに、何故こうも同じように、重い荷物をしょっているのだらうと、悲しくなってしまう。お互いの違いを認めあいお互いを尊重しあう事が大切だ。自分の自由を主

張する時、相手の人にも自由があり、尊重されなければならない。頭では分かっているけれども、実際に行動に移せる人は少ない。親も子もその辺がみえていない。思春期だから傷つきやすく、感じやすく脆いのではない。人生の中を通して実は全部そうなのだ。一般常識の中では語れない現象は多々あるだろう。親が親として、子が子として、一人の大切な尊厳を持った存在であると認識出来ていないと、お互いに苦しむ事になる。子は親の私物ではない。一人の個として大切な存在だ。人は信頼を得ている時、従来以上の力を発揮するし、他人に対しても寛容になれる。そんな事を考えながら、私は人と接している。

そんな中で、今年の八月に、「登校拒否を考える夏の全国合宿二〇〇

〇」という合宿を開催した。約八百人の人が参加し、講演やセミナーを聞き、分科会で交流しあった。不登校を経験した若者や、親のシンポジウムもあり、全国から子ども達が参加し交流しあう場も設定した。本当に長い間ひきこもっている若者も参加してくれた。彼らの求めているものは何だろう。という思いで参加した人達も大勢いた。回収したアンケートは賛否両論。どちらの意見も感謝して受け止めたいと思っっている。

やはりここでも感じた事は、思春期だから親の育て方が悪かったからとか、学校が悪いからとかは関係なく、個の確立が不完全であるという事だった。フリースクール森遊を運営していくうえで何よりも大切にしている事は自由、安全、個の尊重だ。これを実践していく事が若者の自立につながる、親の成長につながることを考えている。

フリースクール森遊を応援する実行委員会

実行委員長 秋山 一巳

フリースクール「森遊」のスタッフとしてささやかながら力を貸している我が息子。管理教育を否定し(當時は不登校ということも社会的に認められず)親に心配をかけたくないと自ら編み出した、適当な不登校をしていたことを卒業してから聞かされ、何とかわいそうな思いをさせてしまった、と改めて親として反省させられたものです。多感な思春期を大人への反発も出来ず、ひたすら、親

にわからないように休んだり、自分の気持ちをコントロール。そんな風に育ったのは私たちの生活信条によるものかと、三十年前を振り返るものです。

我が家の営みの原則は三十年前の「結婚を祝う会」での三つの誓いのことばにはじまる。ひとつは、平和を守る活動に参加し続ける。そのため

にも心身共に元気でなければと玄米菜食を基本とする食生活をする。と。三つめは、家庭内の民主主義を大切に。何事も話し合いで解決することを追求する。

子育ての方針として、好き嫌いく親の作った物は何でも食べる。(強制してきたところがあつたのか、今になって反発しているようです。)更に他人に迷惑をかけないことを基本としてきました。

その結果、我が家の三人の子どもは、三人とも今でも扶養家族となっている。長男・二男ともフリースクール「森遊」の役に立てればと少々手伝いをしています。長女も通院しながら、時々顔を出しています。そして家族五人とも、子ども達を通じて世直しの道を進んでいます。

社会発展のスピードの早さに、も

ろもろの制度がついていけず、あちこちにゆがみが。経済効率を上げることばかりに集中するあまり、大切な心まで奪われてきています。置き去りにされてきた心を取り戻すことは急務です。子どもたちの声を聞きとれない程、大人社会がゆがんでいる背景として、いじめ、不登校、社会問題を起す十七歳等々…。そんな声を心すまして受け止め、子ども

たちが夢や希望をもてるような営みの出来る大人になりたいと思つてやまない。フリースクールは現代の寺子屋だと思つている。個性をのばす教育には様々な方法があることを認め、選択の幅を広げていけたらと思つし、疲れ果て我が子の声を聞けないお父さん、お母さんの居場所、語り場所もあることを付け加えて。

「心の大切さ」

大友 裕美

人それぞれ十人十色の思春期があるように私にも貴重な思春期を体験できたと思つている。

私の思春期はまさに不登校真っ只中！寝ても覚めても将来を描くことが出来ない不安と友人より遅れてしまふ、とり残されるという焦り、けれど動きだせない葛藤の渦の中まるで終わりのないトンネルを全力疾走

しているような恐怖感でいっぱいの日だった。

人生の中でもっとも悩み、今まで心に蓄積された色々な感情達が外に出てくる思春期は子供が自分捜しのスタートを切る大切な時期だと私は思っている。

今、思えば十四歳の時に本格的に学校に行かなくなり「思春期」と言

われる年齢で不登校が出来たのは本当に良かったと思える。

なぜなら、自分なりに物事を考えられる力もついてきた頃だし、自分を客観的にみれる力もついてくる。そんな中で私は自分が歩く自分の人生の土台をしっかり考え、悩み、自分が生きる事の意味を少しだけつかんだ気がした。それはきつと人生の土台に根をはるための大事な時期だったのかもしれない。

私那不登校を人生の汚点と思わず人生の土台づくりが出来た大切な時期と思う事が出来たのは、やはり「私が私の道（人生）を歩く」と決めた事を許し受け入れてくれた「大人」がいてくれたからだと思える。

大人と呼ばれる人は子供達の人生を握っていないだろうか？と思うことがある。間違わないように、失敗しないように、怪我をしないようにと先回りをするのではなく、失敗や怪我をして痛みを知るのも私達人間にとつてはとても大切なこと、痛みを知らずには、優しさや共感はずまない。

私達人間は、失敗や怪我の怖さも痛みも知っている。だけど痛みを痛

みとしてだけ受けとるか、その痛みを味わうかによってその物事の意味を見出すことができているならば、もつと収穫の多い生き方ができているんじゃないかと思う。そして今、子供達が一番必要な力は、自分が生きる意味、生きる喜び、生きる源を私達人人が教えてあげられたらどんなに幸せかと思う。

アニメーション監督の宮崎駿さんがおっしゃっていた中に「子供時代というのは大人のためにあるんじゃない。子供時代のためには大人がいる。子供時代の五分間の体験というのは、大人の一年間の体験より勝る。トラウマもその時にできるわけで、その時期にどれほど社会全体が知恵を絞って子供達がいかに生きられるようにするか。子供達を一回大人の監視下から解放する。そうすれば遊び場がなくても子供は遊びます」。またこんな事も言っておられます。「子供は向こうから来る自動車には気づかなくても、道の向こうに落ちこつている輪ゴムには気がつくんですよ。それは子供の才能なんです。それと輪ゴムを見ないで、自動車ばかりに気をつけろというふうな教育をしていると思うんです」。

私は思春期というのは、この子供時代から大人へ成長するための通過点だと考えます。精神面での自立というのには、その子自身が「自分で考え、自分で決め、自分で責任をとる」これが自立だと思えます。ですから、まずは子供に自由な選択肢を。自由イコール野放しにする事じゃなく、本当の自分自身を見つけれられる時間、その子にしかないその子なりの時間、これを大切に守ってあげたら子供はきつと安心して生活できるのではないのでしょうか。

今ニュースや新聞を開くと、子供達の心の揺れを感じる事がよくあります。それと同時に一つのメッセージも受けとります。そこには：「こんな私でもいいの？こんな私でも愛してくれる？」と本当に命がけの心の声が聴こえてきてしようがない。

子供達は誰もスキで人間を困らせたり、事件を起こしているわけではない。けれども言葉にできない不安や怒り、悲しみで心がいっぱいじゃないかと思う。

大人が大人としての在り方を考えた時、初めて子供が子供になれる気がします。

会員募集

本協会の趣旨に賛同される方は、だれでも個人会員として、また、市町村、病院、会社、工場、婦人会等各種の団体は、団体会員としていつでも入会できます。

入会を希望される方は、次のところへ申し込んで下さい。

〒980-0014 仙台市青葉区本町

一丁目四一三九

宮城県精神保健福祉センター内

(社)宮城県精神保健福祉協会

電話 〇二二(二二四)一四九一

会費

個人会費 年額 二、五〇〇円

団体会員 年額 一口(五、〇〇〇円)

以上

編集発行

平成12年11月発行

社団法人

宮城県精神保健福祉協会

仙台市青葉区本町

1丁目4-39

電話 022(224)1491